

六条院における明石の御方の位置

森田 真由

明石の御方の六条院での描写は、若菜上巻ではまとまったものが書かれているが、それ以前の六条院での叙述は少女巻・初音巻・野分巻・梅枝巻・藤裏葉巻と点在し、なおかつ一つひとつの記述が少量である。しかしそのような描写の仕方が明石の御方の六条院での位置を示しているのではないかと思ひ、ここでは記述のされ方と紫の上との関係を中心に、六条院における明石の御方について考えてゆきたい。

一 六条院の女君と明石の御方

① 少女巻

紫の上の実父である式部卿宮の五十賀を明くる年に迎えるになったとき、源氏は紫の上がその準備をしているのを見て、五十賀を完成した六条院で行おうと工事を急がせ、自らも支度に精を出した。そうした中で花散里も、

東の院にも、分けてしたまふこともあり。御仲らひ、ましていとみやびかに聞こえかはしてなん過ぐしたまひける（七七頁）

とあるように、準備を手伝い、紫の上との仲の良さが明らかになっている。この時点では、花散里はまだ二条東院にいる。同じ少女巻で夕霧の母親代わりを務め始めているた

め、当然源氏の心の中では六条院の一員として迎え入れようという気持ちがあっただろう、東北の夏の町の主人として花散里は入った。六条院は「人間関係を、季節の推移によつて円滑に管理しよう（注1）」という源氏のねらいがあつて成立したものである。それゆえまだ六条院が出来上がっていないうちからも、源氏の望み通り花散里は紫の上との良好な関係を持ち、源氏圈内、ひいては紫の上圈内にすつかり取り込まれてしまった。

一方秋の町の主人と位置づけられた梅壺女御は紫の上に春秋の風流の応酬を仕掛け、歌を詠み交わしている。春秋論の発端は薄雲巻からになるがこの少女巻から具体的な交流がなされ、胡蝶巻で一応の決着をみる。梅壺女御はその出自もさることながら、女御という地位にあり、明らかに紫の上より高い身分である。しかし六条院の一員として組み込まれることで、紫の上と春秋の応酬をするという関係を持たざるを得なくなつてしまうようである。

紫の上・花散里・梅壺女御の三人の関係は「いと思ふやうなる御住まひにて、聞こえ通はしたまふ」とあり、ますます源氏のねらいは実現化されることとなる。しかしここで注意したいのは、明石の御方だけがこの少女巻で他の町に住む方々との関係をなにも持っていないということである。受領階級出身という身分の問題も含んでいると思われるが、六条院に移ってきた時期も三人が一段落した神無月である。紫の上・花散里・梅壺女御と、ここまでは源氏の思惑通り、紫の上を中心とした円滑な交流を深めている

ものの、明石の御方だけが、そうした源氏世界・六条院にまだ溶け込めないでいる。

②初音巻

初音巻は源氏三十六歳の正月の場面であり、六条院造宮後初めての新春である。春であるがゆえに、紫の上が住む春の町の庭は「生ける仏の御国」といわれるまで格別なものである。そして源氏は紫の上と贈答をしたあと、他の女君たちのもとへ、明石の姫君・花散里・玉鬘・明石の御方の順で訪れる。

新年であり、六条院初めての春という大事な日であるにもかかわらず、その夜、源氏は明石の御方のもとに泊まる。「なほ、おぼえことなりかしと、方々に心おきて思す。南の殿には、ましてめざましが人々あり。」と、六条院の中では異常なこととしてとらえられている。このことから分かるように明石の御方はこの場面でも、六条院の女君同士の関係においては紫の上が中心であるというシステムになじんでいないと言えるのではないだろうか。また冬の町である明石の御方が春に登場することから、明石君が冬に固定されないことを象徴的に示している（注2）ともいえるだろう。六条院の秩序からも、そして季節からも束縛されることのない明石の御方を読みとることができる。

③野分巻

野分巻で中心的な論点とされてきたのは、夕霧の視点（注

次に源氏は明石の御方のもとを訪れるのだが、夕霧の明確な視線は全くなくなってしまっている。だが、続いて源氏が玉鬘のもとを見舞ったときには、再び夕霧の視線が登場する。源氏と玉鬘とが寄り添い戯れている様子を目の当たりにし、「いであなうたて、いかなることにかあらむ」と思わずにはいられないでいる。さらに玉鬘の姿を八重山吹に喩えている。源氏は次に花散里を見舞うのだが、すでに夕霧によって花散里の様子がとらえられていたせい、ここに夕霧の視点は無い。

最後に夕霧は源氏とは行動を別にし、明石の姫君のもとを訪れる。几帳の綻びからほんのちよつと垣間見て、「薄色の御衣に、髪はまだ丈にははづれたる末のひき広げたるやうにて、いと細く小さき様体らうたげに心苦し。」と感想を述べ、藤の花に喩えている。

このように、夕霧の視点によって物語が進行している野分の見舞いは、最終的に花喩えをされた紫の上・玉鬘・明石の姫君の姿は完全に夕霧の視線にとらえられている。花散里には紫の上・玉鬘・明石の姫君のような描写や花喩えはないものの、「かかる御仲らひに、いかで東の御方、さるものの数にて立ち並びたまへらむ、たとしへなかりけりや。」と評されているところから、日常から夕霧の視線の中に入れて、夕霧の中では紫の上との比較の対象になっていると言えるだろう。花喩えがされているかないか、日常から見られている存在なのかで視線に捕らえられているかを考えたとき、逃れることができたのは秋好と明石の御方である。

3)である。この夕霧の視点に気を留めながら読んでいくと、紫の上・玉鬘・花散里・秋好は夕霧によって見舞いがないが、明石の御方だけは夕霧による見舞いがある。夕霧の視線すらなく、源氏が訪ねてきたということだけしか描かれていない。明石の御方だけほかの女性とは異なるというところに、六条院における明石の御方の位置があるのではないか。このことを考えるため、一人ひとりの女性の記述のされ方を見てゆきたい。

三条の宮にいた夕霧は、風が強くなりそうだと聞き、六条院を気掛かりに思い、参上した。そして突然吹いた野分により紫の上の姿を垣間見て、「春の曙の霞の間より、おもしろき樺桜の咲き乱れたるを見る心地す」と衝撃を受け、思わず魅せられてしまう。

翌朝、母親がわりである花散里のもとに参上する。ここでも夕霧の視点によって「怖ぢ困じておはしましけるに」と簡潔ではあるが、花散里の様子が記されている。

そして夕霧は源氏の命を受けて、中宮のもとに見舞いに行く。ここでは紫の上の場合のように中宮を垣間見ることはないが、女房や女童の様子が夕霧の視点で描写されている。さらに「吹き来る追風は、紫苑ことごとく匂ふ空も香の薫りも、触ればひたまへる御けはひにやと、いと思ひやりめでたく」と、中宮の存在を感じている。その後、一度南の御殿に戻った夕霧は源氏と共に再び中宮のもとに参上する。しかしこの源氏と秋好中宮の対面の場面は、夕霧による中宮訪問の場面との重複を避けて省いたと思われる。

しかしこの二人の逃れ方を同一視することはできないだろう。

秋好中宮の場合について、助川幸逸郎氏は、風とともにおくられてくる匂いの中に夕霧が秋好の気配を感じている箇所に着目され「彼が秋好について何事かを認識したことをしめすものというより、むしろ彼と秋好の距離のへだたりを強調する行文だとかんがえられる。（注5）」とされ、夕霧の視線が犯すことができるのは、春の町と夏の町という光源氏の世界だけであるとし、（非・光源氏）勢力である秋の町と冬の町は夕霧にとって死角であるとしている。秋好は視線に捉えられていないため、そばまで来ていて存在を分かっているのに容易にとらえることはできないというジレンマのような思いがあると言える。

さらに明石の御方が夕霧に見られていないということ、秋好のそれとは、幾分ニュアンスが異なってくる。「御参りのほどなど、童なりしに入り立ち馴れたまへる、女房などもいと疎くはあらず。」と、秋好の中宮入内の時、夕霧は童だったため、御簾の中に入ることが許されていたとある。この一文が明石の御方の場合と秋好の場合を分けることにならないだろうか。野分巻の時点では秋好のことも明石の御方のことも見てはいない。しかし、秋好の場合は、以前に見たことがある、親しくしていたということを示している。そのため、明石の御方の場合とは異なったものだといえる。

また秋好の場合は、できれば今現在の秋好を見たいとい

う夕霧の心情がある。だが相手は中宮という高位にあり、女房も厳重な警戒はしていないものの隙はない。それゆえ見ることが叶わない。しかし明石の御方に関しては、夕霧は見たいという思いを一切持たない。しかも明石の姫君から紙と硯を借りるとき、「北の殿のおぼえを思ふに、すこしなめなる心地して」(二八三頁)と、明石の御方への格付けは低いものとなっている。このように視線から逃れたという結果は同じものの、そこに至る過程は異なるものであった。

受領の娘という階級的負い目が明石の御方にはある。だが明石の姫君の場合でさえ「見つる花の顔ども、思ひくらべまほしくて、例はものゆかしからぬ心地にあながちに」(二八四頁)と、夕霧自身自分の心理の異常性を感じているのに、受領の娘であるにもかかわらず、その教養と物腰で源氏に気に入られた明石の御方を見たいと思わないというところに、明石の御方の他の女君との違いをみることができているのではないだろうか。

④梅枝巻

明石の姫君の裳着の儀を直前に控え、源氏は薫物合わせを行う。その参加者は朝顔の姫君と六条院の御方々。明石の御方にとっては六条院入りして初めて他の女君とともに参加する行事である。少女巻から見えてきたように、明石の御方は他の女君とは交流もなく、公的私的両方の行事に参加することもなかった。明石の御方が六条院に入ったのは

になっている。

「冬の御方」という呼称は後にも先にもこのみである。源氏に「冬」という季節を与えられているものの、唯一の用例であるこの場面では「冬の御方」は否定的に用いられている。そして「冬」を拒否したのが明石の御方であるというところに、源氏が敷いた秩序の中に定着していない明石の御方の存在が浮かび上がっていると考えるのではないだろうか。

二、明石の御方と紫の上の関係

「めざまし」という語から

六条院の明石の御方を考えるにあたって、やはり紫の上の存在をはずすことはできないだろう。物語り上初登場を果たした若紫巻をはじめとして、明石巻でも、源氏が明石の御方のもとに向かう途中、都の紫の上へと思いをほせるなど、どちらかというと対極の人として位置づけられてきた。また明石の姫君をめぐってでも、実母の明石の御方に対して養母の紫の上という役割分担までなされ、明石の御方が紫の上の存在と対応して展開されている。

そんな紫の上が明石の御方のことを評する語に「めざまし」という語がある。池田龜鑑氏の『源氏物語事典』によると活用形・音便も含めて、形容詞「めざまし」六十一例、

もちろん明石の姫君の実母だからであるが、実際の所姫君に近づくこともままならず、何の役割も負わされていなかった。この薫物合わせは私的なものとはいえ、明石の姫君のために行われたものであり、またこれまでの明石の御方の遇され方をみると一歩前進している。

朝顔の姫君は黒方、源氏は侍従、紫の上は梅花、花散里は荷葉が選ばれた。明石の御方の記述は次のようにされている。

冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに、消たれんもあいなしと思して、薫衣香の方のすぐれたるは、前の朱雀院のをうつさせたまひて、公忠朝臣の、ことに選び仕うまつれりし百歩の方など思ひえて、世に似ずなまめかしさをとり集めたる、心おきてすぐれたり

と、(四〇九頁)

紫の上・花散里と、それぞれが源氏によって与えられた季節の香を調合し選ばれたのだが、明石の御方は冬の香を調合せず、それどころか「一つの季に縛られない、無季の香(注6)」を合わせている。

初めて六条院の行事に参加できたのにもかかわらず、明石の御方は調和しようとはせず、さらに挑戦的な態度で臨んでいる。薫衣香は衣装にたきしめるための薫物なので、より日常的なものである。「冬の御方」ではあるが、むくさの薫物である黒方にはしないで薫衣香にしたところに、明石の御方の卑下の構えをうかがうことはできる。しかし同時に他の人には負けたくないという挑戦的な心情もあらわ

形容動詞「めざましかり」七例、四段動詞「めざましがる」三例、形容動詞「めざましげなり」四例、「なまめざまし」一例ある。

『角川古語大辞典』には「目が覚めるばかりだというのが原義で、褒貶いずれにも用いる」とある(注7)。さらに『古語大辞典』では「平安文学などの用例では、階級意識・上下意識に支えられており、上者から見て、下者の言動に身分・分際を越えたものがあると感じられた場合に、用いられている。」としている(注8)。この階級意識について、石川徹氏は『源氏物語』における「めざまし」を取り上げながら「元来は、単に『目が醒める程だ』といふ意味で、階級意識を持たなかった」とし、それが階級意識の強い人々によって使われることで、貶す場合も褒める場合も「階級意識から来た優越感に抵抗を感じた折に発する」ものとして用いられるようになっていったと論じておられる(注9)。また藤田加代氏は『源氏物語』の「めざまし」は「階級身分家柄血統等のかかわってくる例が圧倒的に多い。」とし、『源氏物語』に先行する作品やほぼ同時代の作品の用例を見ると、大半が「めざまし」と思う根底に身分意識があると分析されている(注10)。

こうした身分意識が濃厚な「めざまし」を紫の上は明石の御方にしか用いておらず、またその用例も嫉妬心からくるもの、というように一貫した使われ方をしている。以下、紫の上に限らず、明石の御方をめぐって「めざまし」が使われている箇所を中心に抜き出し、考察を加えることにす

る。

A (源氏が紫の上に)「(略) いはけなげなる下つかたも紛らはさむなど、思ふをも、めざましと思さずはひき結ひたまへかし」と聞こえたまふ。(②松風四二三)

B (明石の御方の心情) 数ならぬ人の並びきこゆべきおぼえにもあらぬを、さすがに、立ち出でて、人もめざましと思すことやあらむ。(②薄雲四二八)

C (明石の姫君を前に) 上はうつくしと見たまへば、をちかた人のめざましさもこよなく思しゆるされにたり。

(②薄雲四三九)

D (紫の上が源氏に)「さりとも明石の列には、立ち並べたまはざらまし」とのたまふ。なほ北の殿をば、めざましと心おきたまへり。(③玉鬘一二六)

E (紫の上の心情) 梅の折枝、蝶、鳥飛びちがひ、唐めいたる白き小桂に濃きが艶やかなる重ねて、明石の御方に、思ひやり気高きを、上はめざましと見たまふ。(③玉鬘一三六)

F 新しき年の御騒がれもやとつましけれど、こなたにとまりたまひぬ。なほ、おぼえことなりかしと、方々に心おきて思す。南の殿には、ましてめざましが人々あり。(③初音一五一)

G (紫の上の明石の御方評) ものなどうち言ひたるけはひなど、むべこそはとめざましう見たまふ。(③藤裏葉四五二)

H (明石の御方が源氏に)「のたまはせねど、いとありが

「めざまし」く思っていることを知っている。さらにみんなに「めざまし」と思われている明石の御方も、自分がみんなから「めざまし」と思われていることを感じ取っている。思う側と思われる側とは、いささかのすれ違いもなく、明石の御方を「めざまし」とすることで一致している。一方、明石の御方による紫の上評では定まった語がない。ということとは、「めざまし」という明石の御方評はかなり意図的に使われていたということも言えるだろう。

さらに、対面を境に「めざまし」の用例に変化が見られる。A・B・Cでは紫の上は受領の娘にすぎない明石の御方が源氏に気に入られ、自分にはいない子どもで愛をつなぎ止めていることからおこる嫉妬心である。D・Fの場合、A・B・Cの感情に加え、六条院の「北の御殿」として遇されていることへの「めざまし」き思いが加わっていると思われる。さらにFにおいては、紫の上のみならず、女房らも「めざまし」と思うことで、明石の御方の特異な存在感は強調されてゆく。

しかし明石の御方自身が紫の上の感情を察しているHでは、紫の上による「めざまし」の視線が解消されたことを感じている。さらにI・Jでも、源氏によって客観的に紫の上の感情が変化することが示されている。この変化から、明石の御方は藤裏葉巻の対面以後は、「めざましき」者というレッテルから解放されたと言ってもよいのではないだろうか。しかしいくら実の子明石の姫君が東宮后になったからといって、「めざまし」の根底にある受領出身という階級

たき御気色を見たてまつるままに、明け暮れの言ぐさに聞こえはべる。めざましきものになど思しゆるさざらむに、かうまで御覧じ知るべきにもあらぬを、かたはらいたきまで数まへのたますれば、かへりてはまばゆくさへなむ。数ならぬ身のさすがに消えぬは、世の聞き耳もいと苦しくつましく思うたまへらるるを、罪なきさまに、もて隠されたてまつりつつのみこそ」(④若菜上一三一)

I (源氏の心情。紫の上評) さばかり、めざましと心おきたまへりし人を、今は、かくゆるして見えかはしなどしたまふも、女御の御ための真心なるあまりぞかしと思すに、いとありがたければ、(④若菜下二一一)

J (源氏が紫の上を回想) 古りがたくよしある書きざまにも、なまめざましきものに思したりしを、末の世には、かたみに心ばせを見知るどちにて、うしろやすき方にはうち頼むべく、思ひかはしたまひながら、またさりとしてひたぶるにはうちとけず、ゆゑありてもてなしたまへりし心おきてを、人はさしも見知らざりかし、など思し出づ。(④幻五三六)

以上十例がある。A・B・Cは明石の御方が六条院入りする前、D・Fは明石の御方と紫の上が対面する前、Gは対面したとき、H・Jは女三の宮の降嫁以後と時期を区分できる。表から分かるように、紫の上は明石の御方を「めざまし」と思い、紫の上方の女房らは主人と同様に明石の御方を「めざまし」と思い、源氏は紫の上が明石の御方を

の低さはなんら解決されていない。

では何が明石の御方から「めざまし」評を消したのか。それは紫の上の置かれた立場の変化、女三の宮降嫁による紫の上の地位の変化であろう。

紫の上が唯一明石の御方以外に「めざまし」を用いた箇所がある。それは女三の宮のことを源氏と話している場面

「(前略)……には、いかなる心をおきたてまつるべきにか。めざましく、かくてはなど咎めらるまじくは、心やすくてもはべなむを、かの母女御の御方さまにて、疎からず思し数まへてむや」と卑下したまふを、

(④若菜上五二一)

であり、これはGとHの間のものである。紫の上が女三の宮方からみた自分を「めざまし」き者であると推測すること、完全に「めざまし」の語は明石の御方から乖離されていると見て良いのではないか。森一郎氏は、女三の宮にはじめて対面する直前の、

我より上の人やはあるべき、身のほどなるものはなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめなど思ひつづけられて、うちながめたまふ。

(④若菜上八八)

という紫の上の心情について、「第二部において紫上が苦しんだものは、かつて明石の君が苦しんだ『身の程』の屈辱である」(注二)と指摘されている。これまで見てきた「めざまし」という語も「身の程」とともに、これまでの明石

の御方の苦しみを紫の上が受けていることを示していると言えらる。

紫の上を圧迫する形で登場してきた明石の御方の役割は、藤裏葉巻で終わった。若菜上巻からは、紫の上の苦悩の中心は女三の宮へと変化する。そうした三者の関係の中で(注12)明石の御方は紫の上による「めざまし」評から脱することができたのである。

こうして少女巻から六条院に住まい始めた明石の御方は、若菜上巻からようやく六条院の一員として安定することができたのである。

明石の御方による紫の上評は全部で三箇所あるのだが、そのうちの最後の紫の上評の箇所である若菜上巻には、次のように書かれている。

「さも、いとやむごとなき御心ざしのみまさるめるかな。げに、はた、人よりことにかくしも具したまへるありさまの、ことわりと見えたまへるこそめでたけれ。宮の御方、うはべの御かしづきのみめでたくて、渡りたまふこともえなのめならざるは、かたじけなきわざなめりかし。同じ筋にはおはすれど、いま一際は心苦しく」としりうごちきこえたまふにつけても、わが宿世はいとたけくぞおぼえたまひける。やむごとなきだに思すさまにもあらざる世に、まして、立ちまじるべきおぼえにしあらねば、すべて、今は、恨めしきふしもなし。(二三二頁)

ここには女三宮と紫の上を冷静な目で見つめる明石の御

方の姿がある。紫の上が「人よりことに」と他を圧倒した形で、容姿・人柄それに伴った源氏の寵愛と何もかもが群を抜いて優れていることが、明石の御方の口を借りて語られている。二人の女性の姿を自分自身と比較したとき、明石の御方は「恨めしきふしもなし」と二人とは違った形で源氏とかかわることを選択し、「母」として生き始めている自分の人生を納得している。薄雲巻の逡巡の末に選んだ道はここにきて肯定されている。また藤裏葉巻で見た紫の上が受けた女御格の扱いを、その時は羨ましがったものの、もうそれを羨ましがらぬ明石の御方は若菜上巻にはいない。こうした態度の変化について阿部秋生氏は「よくいへば穏やかになっている。わるくいへば、須磨、明石以来のあの明確な性格を喪失して、ゐてもゐなくてもいい背骨を失った人物に変わってしまった」とされている(注13)。

藤裏葉巻までは、六条院内の女君との関係や夕霧のような他者、そして紫の上による「めざまし」評によって分かるように明石の御方は六条院の秩序に安定できずにいて、また明石の御方自身も秩序におさまるまいという気持ちもあった。しかし若菜上巻以降になると、明石の御方の気持ちもおさまり、それと同時に「めざまし」評も消え、ようやく六条院の一員としてその秩序の中に安定した地位を得るに至るのである。

注

(1) 新編日本古典全集『源氏物語③』八三頁頭注

(2) 熊谷義隆氏「源氏物語の四季」『源氏物語講座5』小学館 平成八年一月

時代と習俗』勉誠社 平成三年九月二十日

(3) 伊藤博氏「『野分』の後―源氏物語第二部への胎動―」『日本文学研究大成 源氏物語I』(森一郎氏編)国書刊行会 昭和六三年四月

(初出『文学』第三五巻八号 昭和四二年八月)

『源氏物語の原点』明治書院 昭和五五年十一月

氏は、夕霧が野分巻で視線人物であるということから、野分以後は「光源氏の宇宙が、彼の支配圏に属さぬ異物―他者を孕みこみ、これに次第に侵蝕されてゆく」(二二五頁)ということ論じておられる。

(5) 助川幸逸郎氏「野分巻の季節の〈ずれ〉をめぐって―夕霧のまなざしととらえなかつたもの―」『中古文学論攷』一五号 平成六年十二月 九二頁

(6) 山田利博氏「源氏物語正編の骨格―明石一族を視座として―」『国文学研究』一〇七集 平成四年六月

「源氏は既に一つの季を司る力しかなく、代わって六条院すべての上に君臨する力を得たのは、一つの季に縛られない、無季の香を合わせた明石御方であることが示される」とされておられる。今回はまだ「君臨している」かどうかは判断できないため、「冬」に収まりきれない存在、としておく。

(7) 『角川古語大辞典』角川書店 六一七頁

(8) 『古語大辞典』小学館 一六一一頁

(9) 石川徹氏「平安文学語意考証(その二)―あぢきなし・めざまし・いづら―」『平安文学研究』第十八輯 昭和三十一年五月(六六―七頁)

(10) 藤田加代氏「めざましき」人―源氏物語における「めざまし」の語義究明とその語の人物造型とのかかわりについて―」『日本文学研究』二二(高知日本文学研究会) 昭和五八年十二月 三五頁

氏は他の作品では『蜻蛉日記』一例、『紫式部日記』一例、『大和物語』一例、『宇津保物語』五例あるとし、『古事記』『万葉集』『竹取物語』『伊勢物語』『落窪物語』『和泉式部日記』には用例がないとされている。

藤田氏が明記していない『土佐日記』『枕草子』『大鏡』『栄花物語』について調べてみた。

・『土佐日記』用例なし。(小久保崇明・山田瑩徹編『土佐日記 本文及び語彙索引』笠間書院 昭和五六年四月三十日)

・『枕草子』用例なし。(松村博司監修『枕草子総索引』右文書院 昭和四三年一月十五日)

・『大鏡』一例。(保坂弘司『大鏡新考 総論・索引篇』学燈社 昭和四九年七月三十一日)

・『栄花物語』六例。(高知大学人文学部国語史研究会編『栄花物語 本文と索引 自立語索引篇』)

武蔵野書院 昭和六十年十月三十一日

『大鏡』『栄花物語』の用例も身分意識が見られた。

- (二) 森一郎氏『源氏物語の主題と方法』桜楓社
昭和五四年五月

- (三) 大朝雄二氏「第十三章 二つの予言の系譜」

『源氏物語正篇の研究』桜楓社 昭和五十年十月

四一七頁(初出「源氏物語の長編的契機——二つの予

言の系譜をめぐって——『文芸研究』六三号 昭和四

五年一月)

- (四) 阿部秋生氏『源氏物語研究序説』東大出版会

昭和三四年

	形式	発言者↓聞き手	誰が「めざまし」と思うか	誰のことを「めざまし」と思うか。
A	会話文	源氏↓紫の上	紫の上	明石の御方(養育問題を持ちかけたから源氏もか)
B	地の文	明石の御方(心内)	紫の上	明石の御方
C	地の文	紫の上(心内)	紫の上	明石の御方
D	地の文	紫の上(心内)	紫の上	明石の御方
E	地の文	紫の上(心内)	紫の上	明石の御方
F	地の文	紫の上方の女房ら(心内)	紫の上方の女房ら	明石の御方
G	地の文	紫の上(心内)	紫の上	明石の御方
H	会話文	明石の御方↓源氏	紫の上	明石の御方
I	地の文	源氏(心内)	紫の上	明石の御方
J	地の文	源氏(心内)	紫の上	明石の御方